

秋田の風

日銀秋田支店長コラム

この春、進学や就職をきつかけに秋田を離れる方もいるだろう。今回は、そんな方に向けて書いてみたい。

まずは新たな一歩を踏み出す決心をしたことに、敬意を表したい。これからの飛躍を胸に、新たな場所で勉強や仕事にチャレンジをしようとしていることだろう。また、東京など大都市での生活自体に可能性を感じている方も多いと思う。筆者にもそうした時期があった。応援したい。

これまでの秋田での生活をどう感じているだろうか。振り返った時、自身を育て大きな影響を与えてくれた親、先生や友人など周囲の人たち、風土といったものへの言い尽くせない感謝の気持ちがあるだろう。もしかすると、どこかに閉塞感のような感情も抱いていたかもしれない。その複雑な気持ちに、これできつちりとふたをしてしまおうとすることだけはやめた方がよい。

日本経済は、最近まで長きにわたって停滞していた。その間

旅立ちへのエール

に、1人当たりの名目国内総生産（GDP）は多くの国に抜かれ、経済協力開発機構（OECD）加盟38カ国中22位、先進7カ国（G7）では最下位だ。

成長力を取り戻そうと努力はしたが、そのきつかけをものにできず、経済全体に閉塞感が定着。例えば賃金・物価が上がりにくいことを前提とした慣行や考え方は、企業だけでなく家庭の中にも深く染み込んだ。これまでの生活で感じていたかもしれない閉塞感には、そうした日本の経済環境に起因する部分も

る。ぜひ、みずみずしい感性で多くのことを吸収し、いずればダイナミズムをけん引する側に立つことを目指してほしい。

ただ、経済のバランスは、停滞していた日本が次々と他国に抜かれたように変化する。また、世の中の価値観も時代により変化するし、自身の考え方も成長やライフイベントを経て変わるだろう。そのため変化への耐性を身に付ける必要がある、この点、秋田という選択肢を持つていること（この先も持ち続けること）には、おそらく今感じて

かのきつかけで立ち止まった時、そうした先輩たちが見ていたものに想像を巡らせるのもよい。

最近、勉強や仕事でのリモート環境が定着しており、今後さらに進化するだろう。労働力不足の下、副業や兼業を積極的に関与を続けることが容易な時代になった。いずれにせよ、物理的に離れるからといって秋田という選択肢を排除する必要はない。

秋田育ちの感性大切に

おそらくあるだろう。

しかしここ数年で、経済は動き出している。企業収益を見ると、全体的に改善しているが、特に大企業の改善が先行している。大企業が多い東京などの大都市で、経済のダイナミズムをじかに感じながら勉強や仕事をしたいという気持ちは理解でき

いる以上の意味がある。

秋田の県内総生産は、日本のGDPの0.6%程度（47都道府県中42位）だ。これは見方を換えれば、経済圏が小さいがゆえに、自らのチャレンジの成否をじかに確認できるフィールドが近いということでもある。そのフィールドを生かし、まずここで試してから大都市や海外のマーケットを目指すことや、大都市でもまれて身に付けた力をここで発揮してみることがよく考えられる。

閉塞感の背景として経済環境の話をしたが、それ以外にもさまざまなあり、それらの方が大きいという方もいるだろう。秋田には、保守的な価値観がより残っているとする論評を、筆者も多く見聞きした。ただ、価値観も時代により変わるし、自ら変えようと動く県民は増えている。時代の変遷期に感じた違和感をも一つの養分にし、秋田で育まれた豊かな感性を大切に、そして自身の可能性を信じ、この先チャレンジをしてほしい。



今、県内では若者などによる創業が増えている。この先、何

（片桐大地・日本銀行秋田支店長）
〈随時掲載〉